
リリカルなのはViVid ～幽霊の汽車の戦士～

アマノアキマサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはVivid 〜幽霊の汽車の戦士〜

【Nコード】

N3825Y

【作者名】

アマノアキマサ

【あらすじ】

『幽霊列車』の力を司る戦士『幽汽』。それは何のためにあるのか。それをまとうものは何を思っているのか。

Memory・0「今日」(前書き)

うまくかけるか。超心配。

Memory・0「今日の日」

『新暦0079年』・ミッドチルダ

世界はいたって平和だ。

「お兄ちゃん。朝だよ。起きてる?」

「起きてるよ、ヴィヴィオ」

このようにかわいい義妹『高町ヴィヴィオ』が起こしに来てくれる。まあ、僕は大体起きているので安否確認といったほうが正しいが。

「じゃあ、早くでてきて!もうすぐ朝ごはんだから!」

「はい」

ヴィヴィオはそう言って僕の部屋から出て行った。僕もそのあとについて行くように部屋から出る。

「ヴィヴィオ、レックス。朝ごはんだよ」

「はあーいつ!」

「おはようございます。母さん」

「おはよう、レックス」

こんな日常が平和でないはずがない。

Memory:0「今日の日」

僕らの母は『高町なのは』である。

僕とヴィヴィオと母さんは血が繋がっていない。

ヴィヴィオは4年ほど前から、僕は1年ほど前から彼女の養子である。

「ヴィヴィオもレックスも今日は始業式だけでしょ？」

「そだよー。帰りに寄り道してくけど」

「はい。僕は一度家に戻ってから散歩するつもりです」

「そう。今日はママも早めに帰ってこれるから、晩ごはんは二人の進級お祝いモードにしようか？」

「いいねー」

「はい！ぜひ！」

「それじゃあ〜」

「行つてきます」

僕は近くにある私立に、ヴィヴィオはS・ヒルデ魔法学院に通っている。

僕が14で、ヴィヴィオが10歳である。

僕は二人と別れ学校に向かう。

「もう一年になるのか……。ヴィヴィオに助けられてから」

僕はポケットから黒い『パス』を取り出す。

「今日はでないといいな……。って、いつでも空気読めない奴らに何を願つてもだめか」

僕は『パス』をしまい、歩みを止め空をみる。

あの日をこんなにいい天気だったな

僕がヴィヴィオと出会った日は。

T r a c k : 1 「記憶喪失なボク」 (前書き)

目標時数に達しなかった(シヨボン)
どうして人目線でしか書けないんだ？

Track:1「記憶喪失なボク」

はぁ、はぁ、はぁ

荒い息

俺はとぼとぼ歩いていた

めまいがする

体が重い

体中が痛い

俺はどうしてこんなところにいるんだ？

俺は何をしていたんだ？

俺は力なく倒れ、俺の意識はそこで途切れた

Track:1「記憶喪失なボク」

ここはどこだ？

目が覚めると僕は知らない部屋にいた。
かなりボーとする。

僕があたりを見渡し、現状を把握しようとしていると、女の人が部屋に入ってきた。

「あ！目覚めたんだね。身体痛いところない？」

「あ、はい」

サイドテールの20代くらいの女性は僕に質問してきた。

「あのここは……？」

「私の家だよ。ヴィヴィオが道で倒れていた君を運んできたの。二日も寝っぱなしだったんだよ、君」

「そうなんですか……」

倒れていた？どうしてだろう？僕、体丈夫な気がするの……。

「あ！自己紹介してなかったね。わたしは高町なのは。君は？」

「僕は………あれ？」

「？」

「誰なんだ？」

「はい？」

僕は誰なんだ？なんなんだ？全く思いだせない。

「もしかして覚えてない？」

「は「ただいまママ！お兄さん起きた？」

僕がその質問に答えようとしたとき、女の子が部屋に入ってきた。

「あ！大丈夫ですか？お兄さん！」

「……………」

「お兄さん？」

なんだこの感じ。あ、これ既視感だ。僕この子に会ったことがある？
僕が首をかしげていると、彼女は僕のほうをじっと見つめるくる。

「ヴィヴィオお帰り。このお兄さんんだか記憶がないみたいなの」

「へえ？」

「名前も思い出せないみたいなの」

「ええ〜〜〜！！！」

彼女が驚いた瞬間、僕はあることを思い出した。

「レックスだと思っています」

「うん？」

「名前です。愛称か本名かは思いだせませんが………そう呼ばれてみたいですよ」

「レックスくんか……。なんか覚えてることあるかな」

「えーっと………何も………」

「そっかー」

僕はようやく働いてきた頭で、思い出そうと頑張った………が何も思い出せなかったのであきらめ淡々と答えた。

「記憶なくなっちゃってるのにすごく冷静だね、レックスさん」

「えーっと、君がヴィヴィオ？」

「うん♪私は高町ヴィヴィオだよ」

「ありがとね。僕拾ってくれて。なのはさんもありがとつございます」

「え？ああどういたしまして」

「気にしないで。あと当分うちにいて。記憶がないんじゃない場所もないんですよ？」

きわめて愚問な気がするんですが、なのはさん。

「あ、レックスくん。一応病院行こうか」

「え？」

「検査しとかなきゃ」

とても嫌な感じがした。僕はきつと病院嫌いだったのだろう。そんな感情に戸惑ってしまっていた僕は、なのはさんに病院へと連れてかれた（ヴィヴィオちゃんも付いてきた）。

「……………次元漂流者だったのか、レックスくん」

「家どころか出身世界もわかんない……………か」

病院での待ち時間ミッドチルダにこの世界ミッドチルダについて二人にいろいろ教えてもらった。だが、僕にこの世界の地理などに該当する知識が全くなかった。おそらく僕はこの世界の人間じゃないだろう。ミッドチルダ

「だ、大丈夫ですよ、レックスさん。きっと見つかりますって」

「ありがとヴィヴィオちゃん。僕落ち込んだりしてないから」

病院での検査によってわかったのは、僕が『エピソード記憶』を忘れていたということだった。

『エピソード記憶』、つまり『思い出^{過去}』が僕にはないことになる。はたからみればショックなことだが、こちらからすると大したことがない気がする。

いや、現象は大したことだ。僕が言っているのは精神的面だ。もともとこの世界に^{ミッドチルダ}いなかったのだから、誰と会おうと初対面なのだから忘れてしまつて申し訳ないという気持ちに駆られない。まあ元の世界に残してきてしまっているだろう家族には申し訳ないのだが……。

『エピソード記憶』を失う記憶喪失は、精神的に大きなショックが加わると起こることがあると噂で聞いたことがある（いつどこのかは知らないが）。

つまり、思い出さないほうが幸せな過去が僕にはあるかもしれないということだ。

それから考えると最悪二度と会えないだろう。

まあ、それでも記憶は取り戻すつもりだが。

逃げてもしようがないもん、自分の過去^{じふん}なんだから。

「まあ、何らかのきっかけで思い出すかもしれないから心配しないでいいよ、レックスくん」

だから僕は極めて落ち着いていますって……………こういうセリフはく奴ほど落ち着いてない気がする……………。

「さあ、二人とも帰ろ」

その晩

「……………何かな？この不愉快な気配は？」

僕は何らかの不快感を感じていた。

「イマジン？」

ふと口からこぼれた言葉。

その意味は……………？

なんだっけ？

なんだか重要なことだった気がするが思い出せない。

思い出そうと必死になっていると、いつの間にか不快感は消えていた。

「嫌な予感しかないな……………早く記憶取り戻さないと」

明日からいろいろやってみようと心に決め、僕は眠りについた。

同刻 ミッド北部

『お前の望みを言え。どんな望みもかなえてやる。お前の払う代償はたった一つ』

砂のお化けが一人の人の前に現れ、悪魔のようなささやきをする

「——————を探して私のもとへ」

人は自分の望みを言った。

『了解した』

砂のお化けは怪人となり暗闇に飛び去って行った。

翌日朝

「え？倒れてたところに案内してほしいんですか？」

「そう。なんか思い出すきっかけになるかもしれないからね」

僕は朝食前に、ヴィヴィオちゃんにお願いしていた。

やはりきのうの不快感が気になる。嫌な予感しかない。

「わかりました。じゃあ、1時間後ぐらいに出かけましょう」

「あ、ヴィヴィオ。レックスくんと出かけるの？」

なのはさんが三人分の朝食を持ってキッチンから出てきた。

僕は手伝いますと言ったのだが、座っててと断った上に僕に何かする隙を与えられなかったのであきらめた。

なのはさんいったい何者なんだ？

「うんそうだよ」

「じゃあミッドを案内してあげて、いろいろ知っておいたほうが便

「利だからね」

「わかった」

「お手数掛けます」

「約1時間後」

「行ってきました」

「行ってきます」

「行つてらっしゃい。二人とも気をつけてね」

僕はヴィヴィオとともに町に出た。

まず向かうは僕が倒れていた場所。僕がこの世界に痕跡を残している場所は高町家とそこだろう。

ヴィヴィオちゃんは歩きながらこの地域のことを説明してくれている。

ヴィヴィオちゃんとはかなり仲良くなれた。結果、彼女の口調によそよしさはなくなった

彼女は性格も容姿もかわいい女の子だ。

だが、変だ。

何が変わかと思われたらと極めて説明しづらいが、他者とは何か違う。もちろんなのはさんとも違う。

「それで……。……聞いてる？レックスさん！」

「！ごめん。きいてなかった」

「まあ。考え事するのはいいですけど、人の話は聞きましょうよ」

「次から気をつけます」

「ふん」

機嫌を損ねてしまった。……………ん、こんなこと前にもあった？

「ヴィヴィオちゃん」

「なんですか？」

「僕と会ったこと本当じゃないの？」

「ないですよ。あそこら辺で行き倒れてたレックスさんを見つけたのが初めてですが？」

ヴィヴィオちゃんは公園近くの道を指さしながらそう断言する。やはり気のせいかな。

「そう。ありがとう。それで僕はあそこで倒れてたの？」

「そうですよ」

僕は現場に向かいながらヴィヴィオに尋ねながらあたりを見渡した。

……………ああ、やっぱりここにあったんだな。
？なに？

「？なんか言いましたか？」

「え？いいや。……公園も見てもいいかな？」

「もちろんですよ！」

ヴィヴィオちゃんと僕は公園をまわった。

「ヴィヴィオちゃん。ちょっと僕トイレ行きたいから待ってくれる？」

「はい」

僕はヴィヴィオちゃんと別れてトイレに向かうと見せかけて最初の場所に向かい、茂みに近寄った。

「みつけた。僕のパス」

僕はあたりに誰もいないことを確認してからパスをポケットに拾い上げた。

これを何に使ったのかはまだ思い出せないが重要なのは目に入ったときから気付いていた。そしてその存在をあの子に知られるわけにはいかないと思った。だからこうやって一人になる口述を作ってここに來たのだ。

無事回収できたのでヴィヴィオちゃんのもとに帰ろうと思った時。

「イマジン？」

また昨夜と同じ不快感。だがより強く体中に感じる。
もしかして近い？

ヴィヴィオちゃんが危ないかもと直感的にそう思った。

「きゃあああーーーーー」

「!？」

悲鳴はヴィヴィオちゃんのもだった。僕の直感にあたってしまった。

「助けに行かなきゃ」

僕がそう思うと何の前触れもなくベルトが腰に巻きついた。ベルトはなぜかバツクル部分がかなり大きく金色だった。

「なにこれ？」

とつばやくながらも、僕はなんとなく右手に持っていたパスをバツクルにかざした。

すると僕は一瞬にして鎧に包まれた。

「なにこれ？」

二回連続このセリフ。

だがこれならイマジンと戦える。

そう確信し悲鳴の聞こえたほうに走って行った。

Track:1 「記憶喪失なボク」 (後書き)

感想募集です

Track:2「幽汽参上」(前書き)

書き方変えました。

Track:1はいつか書きなおします。

Track:2「幽汽参上」

オッドアイの女の子、高町ヴィヴィオは『怪人』に出会ってしまった。

『怪人』はワニのような姿をしており右手には大きな剣が握られている。

（なにこの怪物！）

そいつは明らかに殺気を出していた。

ヴィヴィオは構えの姿勢を取った。

彼女はこの『怪人』の話や噂を聞いたことがなかった。

だから何の目的で自分が狙われるのかわからなかった。

「我が契約者はデバイスを御所望なのだ。黙って渡せば命は助けてやるぞ、小娘」

「デバイス？」

アリゲーターイマジン

この『怪人』はデバイスを求めているらしい。渡せばこの危機的状況から解放されるかもしれない。

だが彼女はデバイスなど持っていない。

彼女の母である高町なのはが教育の都合上持たしてくれていない。

（どっしょっ）

頭で考えるが何も浮かんでこない。極度の緊張のためである。

「早く渡せ」

「わ、わたし、デバイス持ってないです！」

どうしようもなくなったので彼女は正直に答えることにした。

「そうか。それは残念だ……………まったく無駄に殺さなくてはいけないではないか！」

「！！」

ヴィヴィオはその言葉を聞いた瞬間しゃがんだ。

ブンと音がし後ろにあった木が横真つ二つに斬れる。

ヴィヴィオは目を丸くし戦慄する。

（殺される）

彼女はそう思い走って逃げた。

だが……………。

「フン」

「きゃああああー……………」

今度は地面がえぐり取られ、彼女は転倒してしまった。

「初見で私の斬撃を交わすとはなかなか面白い。だがここで死んでもらう」

『怪人』はゆっくりとヴィヴィオに近づいていき大剣をふりあげた。

彼女は立てず腕で顔をかばうように防御の姿勢を取りながらも、死を覚悟した。

「おりゃー！ー！！」

その時掛け声とともに何かが走ってきて『怪人』を蹴り飛ばした。

「え！？」

ヴィヴィオはその正体をみて驚いた。

そこに立っていたのは全身を鎧で固めた幽汽プラットフォーム（以後プラット幽汽）だった。

Track：2「幽汽参上」

レックスの変身したプラット幽汽はヴィヴィオをみる。
どうやら目立った外傷はないようだ。

「立てるかい？」

「え、あ、はい」

突然現れた謎の戦士に彼女は驚いているようだったがすぐ正気に戻り、立ち上がる。

「逃げる。ここは危険だ」

プラット幽汽は彼女にそう伝える。

「でも、わたしここで知り合いを待ってたんです。だからあの……」

ヴィヴィオは自分の身が危険なのにレックスのことを心配していた。

（本当にいい子だな、この子）

絶対この子に手は出させない。彼はそう心に誓う。

「大丈夫だ。そいつも僕が守るから。先に逃げて」

「は、はい」

彼女はこつちを時々振り向きながら走り去って行った。

「よくもやってくれましたね。えーっと……………」

「……………」

（僕は鎧^{コシ}の名前を忘れている。こいつが知っているなら名前を知るチャンスだ！）

彼は自分で思い出すつもりなのだが、名前を答えられないと厄介なことになるかもしれない。

例えば時空管理局の局員が自分のことを調べ始め、名乗らない名乗れない〃名前を知らない 記憶がない人みたいな推理をされると自分が候補者になる可能性がある。そうなるとなのはさんたちに迷惑がかかるかもしれない。

まあ、考えすぎであると他者はゆうだろう。

「……………電王？」

「ちげーよ！」

即否定してしまった。根拠はなかったが絶対違うと思ったのだろう
……………口が。

「失礼。あなたはゼロノスでしたか」

「ゼロノスでもないよ！」

また即答。

「じゃあなんですか？あなた」

「僕が訊きたいね！」

プラット幽汽はそう言い放つと腰についていたサヴェジガツシャーを1組取り、ソードモード（以後SSソード）を組み立てながら、

アリゲーターイマジンのほうに駆けていく。

プラット幽汽はすれ違いざまにSSソードを振るう。

「くっ!？」

アリゲーターイマジンは大剣を取りこぼす。彼はイマジンの武器^刃を奪った。

プラット幽汽はすぐに切り返しSSソードのオーラソードを相手の首におき、引き抜く。

「ぐあああああ！」

イマジンは自分の体を作っている砂をこぼしうめき声を上げる。

「誰に手出したか、わかってる？」

プラット幽汽はそう吐き捨て左下から右上へとSSソードを振る。その一撃も食らったアリゲーターイマジンは砂を大量に噴き出し爆発する。

「……………」

プラット幽汽はまわりに人がいないのを確認してからベルトをはずし変身を解除した。

（ここにいとまずいかな？）

レックスはそう思い場所を移動する。公園の敷地から出るとすぐヴィイオの姿を探す。緊急事態とはいえ女の子を一人にしておくのは極めて不安だ。

ヴィヴィオを探しながら彼は考え事をしていた。

（幽^{アレ}汽が僕のであるのは確かだけど、名前思い出せないな……。あとアレを待っていた時の違和感……。もしかしてアレは本来の姿じゃない）

違和感があった。力がなじまないような感じの違和感が。

（なんで？なんで完全じゃない？）

彼は今さっきイマジンを倒している。だが彼はそれを幽汽の本気だとは思っていないようだった。おそらく彼の直感だろう。

（僕が過^{ボク}去を忘れているからかな？）

彼が自身の解を出し終わったとき、女の子が視界に映った。金髪でオッドアイ。ヴィヴィオだ。

「ヴィヴィオちゃん！」

「あ！レックスさん！大丈夫でしたか？」

彼女はその表情からレックスのことをとても心配していたことが分かる。

（嘘はつきたくないけどごめん）

「うん。なんか変な格好した人が助けてくれた。ヴィヴィオは大丈夫だった？」

「はい。わたしもその人に助けてもらいました」

「そう。よかった」

レックスは自分が変な格好な人ですとは言わなかった。パスことも
そうだが他人に知られたくないと本能的に思った。

「今日はもう帰りましょう」

ヴィヴィオはけがはないと言っていたが服は汚れている。だから彼
はそう提案した。

「え？でも……………」

「ヴィヴィオちゃん服汚れちゃったし、焦ってもしようがないです
から」

「うん。わかった」

レックスは小さい子を慰めるようにヴィヴィオに言い、彼女はそれ
に従い帰路についた。

二人は家に戻るとレックスは考え事の続きをすると部屋に戻り、ヴ
ィヴィオはなのはをはじめとする管理局員に報告を入れた。もちろ
んイマジンについてだ。

現在お風呂というよりシャワー。レックスの助言だ。

（いったいなんだったのかなあ、あの人）

ヴィヴィオは幽汽について思いめぐらしていた。

（助けてくれたから悪い人じゃないんだろうけど……………）

彼女は幽汽の事も報告していた。だが言っていないこともある。

怪人なんかよりも彼のほうが危険な感じがしたということだ。

（あの人、力があるけど安定してないような気がしたなあ）

ヴィヴィオはそこを不審に思いながらバスルームから出る。

服を着てリビングに向かうとレックスがいた。

「レックスさん……………？」

彼は考え込んでいるみたいで呼びかけても反応しない。

（むう……………）

初めて会ったときから思っていたが、彼が険しい顔になると胸の奥がむずむずする。だから公園への道のりの中で注意した。

わたしの前でそんな顔しないで

というつもりで。

だが彼は察してくれなかった。まあ、自分のことではいいっぱ

いの彼にそんなことを望むのは多少無理がある。
ヴィヴィオはレックスに近づき頬をつねる。

「！？痛い！痛いよヴィヴィオちゃん！」

「そんな険しい顔しない！私悲しくなってくるから！」

「え！ごめん」

「違うの～！わたしは謝ってほしいんじゃない、相談してほしいの！」

レックスはキョトンとしていた。ヴィヴィオは初めてみる顔だ。彼とって彼女の発言は今までの何よりも予想外なことだったのだろう。しかし彼女はそんな彼に構うことなく続けた。

「わたし、レックスさんには笑ってもらいたいです。だから不安や心配事はわたしに打ち明けてください！きっと少しは楽になりますから！」

レックスは今度は呆けた顔をしていた。そして笑った。

「はあはあ。九歳の女の子に心配されるなんて、情けない僕」

彼は自分をあざけていた。そして……………。

「ヴィヴィオちゃん。ありがと。今度からそうさせてもらおうよ。あとヴィヴィオちゃん、君をなんかあったら言って。記憶なくなつて僕は君の役に立てるように頑張るからさ」

「うん！」

「ところでヴィヴィオちゃん。今日のワニ怪人とあの戦士についてどう思う？」

「？あれ？さっきまでそのこと考えてたんですか？」

「そう。戦士のほうは悪い人ではなさそうだけど、ワニ怪人のほうはあからさまに悪者だったよ。そんなのが出たところにヴィヴィオちゃんを一人にしておいたなんて……という後悔に対する反省を帰ってから延々と続けてたんだ（嘘だけど）」

「そ、そうだったんだ。てっきり記憶のことで悩んでるのかと……」

「ヴィヴィオちゃん。僕は過去じぶんのことで悩んだりしないよ。悩むんじゃないくて解析するから。『過去にとらわれないが二の舞は踏まない』それが今の僕のポリシーさ」

レックスは堂々と言い切る。ヴィヴィオは彼の勢いに驚きながらも見蕩れていた。

（レックスさんなんかっこいいな……）

その時突如ヴィヴィオの通信端末が鳴る。

「あ。オットーからだ」

「オットー？」

「うん。わたしの知り合い！なにに、明日無限書庫での調べ物にご協力してくださいませんか。か」

「無限書庫？」

「大きな図書館のことだよ」

ヴィヴィオがそう説明するとレックスは目を輝かせる。どうやら書物に対する好奇心は旺盛のようだ。

「ヴィヴィオちゃん、そこ行くの？」

「うん」

「じゃあ僕も連れてってくれない？」

彼は興味しんしんという顔だった。ヴィヴィオはもちろん断らなかった。

Track:2「幽汽参上」(後書き)

感想募集

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3825y/>

リリカルなのはViVid ～幽霊の汽車の戦士～

2011年11月27日21時54分発行